「西高卓球部の思い出」

4 期　平川進次

あれから半世紀プラス 15 年も経った。82 歳の脳みそから微かな記憶を呼び起こして見た。荻村さんを始めとする当部部員の輝かしい戦績は、すでに随所で披露されているので、ある意味、秘められたエピソードをご紹介します。

昭和 24 年 4 月、六三三制の施行を機に、私は私立の旧制中学から、都立第十新制高校に入学した。1 年後に都立西高校に改名されたと思う。
入学して目にした卓球部員募集の貼り紙を見て応募したとき、前を歩いていたのが同時に入部した藤田君だった。旧制第十中学校から進学した同学年の部員が 7～８名に加えて、上級生には 3 年生の田中さん、2 年生の市川（功）さん、荻村さん、岡崎さん、吉田さん、田辺さん、市川（善）さん、花井さんら、部員合計 20 名弱の所帯でした。田中さんが、薄板にラバーを貼り付けた私のラケットを見て、ご自分のラケットを私に下さった思い出もあります。

古い体育館内をベニヤ板で仕切った教室跡に、まともと云える卓球台は 1 台。当然ながら、練習は早い者勝ち。昼休みのゲームはノータッチ方式（1 回でも空振りしたらカウント無関係で敗退)。強烈なスマッシュが最大の武器。
そんな中で、、卓球台が寄贈（払い下げ?）されるとの話があり、ある日、1～2 年生数人で水道道路（現井の頭通り）をリヤカーを引き代々木方面まで、汗だくになりながら受取りに行ったことを思い出します。
それでも、練習の待ち時間は結構長く、顧問の加藤良作先生が傍らに見えたとき、市川（功）さんが台横の床面に、チョークで因数分解の数式を書いて質問されていた風景があったり、あまり将棋の強くない荻村さんが、自分の王様が詰まれると、持ち駒で相手に王手をかけ、「一手負けただけだ」と云って悔しがっていた光景を思い出します。日の出屋のおばさんが、荻村さんの顔色が悪いと云って心配していたこともありました。

同学年部員は、亀田、甲子、原田、藤田、大橋らの一軍、準一軍に続いて加納、中村、竹内、加藤、久保田、三玉、私と云った二軍部員でした。
荻村さんは、二軍部員にも目をかけて、加藤君をカットマンに、私をショートマンに仕立てようと指導してくれました。ある時、部誌をみたら「加藤、平川は何をやってるんだ」と書かれており、進歩しない二人を嘆いている様子でした。（後年、やろう会で対面したとき、「君にはショートばかりやらせて済まなかった」と言われて、記憶の良さに圧倒され、答えようがなかった。亀田君は

「ショートマンがいたから、ショートへの対応ができた」と良いことを言ってくれた。）
さらに、荻村さんは二軍部員には対外試合の経験が無かろうと、ある日荻窪高校との親善試合に引率してくれた。徒歩で行く途中、天祖神社前の道路で一列に並んで立小便をした記憶があるが、試合の勝敗は記憶がない。罰当たりなことをしたものです。
私の記憶は些細なことが残って、肝心なことが抜けてしまうようで、つくづく厄介なものと思う。認知症の前触れかも。

2年生への進級とともに新人が入部してきた。斉藤さん、荒瀬さん、吉武さんの3名の女性と若山君らの顔ぶれだった。4期生に比べて少人数の5期生だ。
私は、3年生への進級と同時に退部してしまったので、6期生にはやゝなじみが薄い。

2年間の部活ではあったが、良き恩師・先輩・同輩・後輩にめぐまれ、毎日が楽しく青春を謳歌した時期であった。残念ながらＯＢの何人かは、すでに天に帰った者もいて寂しさは禁じ得ないが、脈々と続く「卓球やろう会」を通して、この伝統ある西高卓球部が永遠に栄えることを祈っています。

以上